

眞生

第十卷 第二十二號

偉人の生活

□私は偉人の生活を愛する。偉人と云ふ名ではない。偉人と云はれる人々の生活の内容こそ、私が本當に求めつゝあるものであるからである。説明者としての生活でなく體現者としての生活である。

□夫にしても、如何に彼等が其の道に眞剣なりしことよ。多くの偉人はその爲めに生命をさしつけてゐる。食慾や性慾がなかつたのではない。更にそれよりも大なる道の爲に之を自ら超越した。

□釋迦孔子、キリストなど道を求むるに専心であつたことは言ふまでもない。其の他多くの人々で世に偉人と言はれる人々に此の心のなかつたものはない。而も之を求めて、之を得たものは終生その爲めに此の一身を献けてゐる。之萬人の及ばない處である。

□此の意味に於て私は偉人の生活を受する、乍らどうしたものか自ら偉人となることを欲しない。偉人が嫌いか、或はさうかも知れない。

たゞ私は道を受する偉人の生活が好きなのだ。

□私の愛するものは道なのだ。道こそ私の生命である。神の生活、佛の生活、若しそれらの生活が道を受するの生活でないならば誰か此の世に神を愛し、佛を受するものがあり得やう。

□神を求むるの生活とは道を求むるの生活である。眞理に生るの生活である。最上人の生活、最上尊の生活、即ち之を佛陀の生活と云ふが佛陀の生活と云ふも要するに此の道の生活である。道の外に眞理はない。

□而も此の眞理は萬人の神たるの眞理であり、佛たるの眞理でなくてはならぬ。釋迦、孔子、キリストの偉人と云はれるのも、此の萬人の行くべき眞理を一生を通じて、全身をその道の爲めにさしつけたところにある。(念)

家 い 尊

目次

尊い家	中野尠子
宗教と戦争	土屋観道
宗教と人生	土屋観道
或る青年の嘆き	土屋観道
境遇の相違か	土屋観道
吾朋便り	土屋観道

真理の叫び！

□世に自らを真理の體現者なりとは言いつる人がないかも知れぬ。それは自らを完全者だと言へない限り言へない言葉であるからである。乍然自らも亦、真理を求むるもの一人だと言ふことは必ずしも言い得ないことではない。

□而も同じ真理を求むるにも己に得たるものと未だ得ざるものとの區別がある。前者は道を求めて己に之を得たるもの、後者は之を求むるも未だ之を得ざるものである。

□乍然一度道を求めて之を得たる人に自ら之を實現すべく全身を込めて之に献けないものはあるまい。何となれば道を求むると云ふことが己に此の道の爲めに此の身を献けると云ふことを意味してゐるからである。

□従つて此の真理の體驗は現在の自己を理想の自己へと引上ぐると共に、亦此の理想を現在の自己へと實現せしめずしては止まぬものである。

□而も此の理想の實現は自分一人の實現でない限り、之を萬人の生活に實現せしめずにはゐられないものとなる。此の意味に於て宇宙の真理は自己の真理となり、自己の真理は宇宙の真理となつて萬人の上に叫びかけられずにはゐられないものとなる。

□されば宇宙の真理は私の真理であり、私の叫びは宇宙の真理であらねばならぬ。(念)

家の立派な事や、金の有る事には、滅多にビツクリせぬが、信仰氣の篤い、家中が全く仲よく置はしく暮してみえる家を見ては、本當にビツクリします。どうして此の家はこんなに調子よく、旨く行つてゐるのか知らんと羨しくなります。

家に何が有るより、何を持てるより、家中が和合し、協力して、精一杯努力して行つて居れる程、尊い事はありません。

内に魂の籠つて居らぬ家は、どんなに金や道具が一杯家に詰つてゐても、家に身がない、重味がありません。家中の者に皆魂が一つ宛籠つて居れば、十人が十人一樣に心が揃ひ、力が合はさつて仲よく行きます。それが家に生命が無い時は、どんなに物が澤山あり、人が澤山居つても、皆がバラ／＼で、各自勝手な意見や我儘を通して衝突ばかりして居ります。衝突のあるところには、各自が傷つき、各自が能力を削減せられます。

信仰といふことは、そう云ふ風に、我々の衷心から「本當の力」が湧き上つて來ることです。我々の家にも、國家にもそう云ふ力が湧いて居れば、家も國家も榮えます。活氣がきます。それがそう云ふ本道からの力が湧かぬ時は、恰度湧口からの噴出る水が止つた井戸のように、直ちに水が涸れ、水が腐つて了ひます。

我々が靜かに祈る時、我々の奥底からは、尊いやさしい心が湧いて來ます。そして其柔和な素直な心が、素晴らしい活氣に變つて、元氣な力強い仕事をさして呉れます。そう云ふ祈りの心、愛の心が家中に充ちて居れば、必ず家中は旨く行つて居ります、それがそういふ心が缺けて居り、家中が干乾びてゐるから、家が暗く淋しいのです。眞實の力は、必ず明るい、お念佛に充ちた家から現はれます。

我々の人格の中、我々の生活の中にはさういふ目に見えぬ生命が常に籠つて居らねばなりません。

(尠子)

宗教と戦争

土屋 觀道

一、戦争の種々相

□今日では武力を以つてするのみが必ずしも戦争ではなく、そこには思想もあり、又經濟戰もないではないが、こゝでは武力を以つて戦ふところの戦争を以つて戦争とすることにする。

□ところで、一概に戦争と云ふけれども、その戦争の起りや戦争者の心持ちを研究すればそれについてまた色々の種類があるやうである。中にも自己の野心を満足せんが爲めには其の相手の如何を問はず、悉くこちらから壓迫を加へて之を乗り取り、場合によつては何等の理由なく、たゞその國を併合せんが爲めにその國に戦いを始むるものもあり、又一面には常に平和を欲するけれども、敵から攻められて止むなく之を防戦すると云ふものもある。

□而も同じ侵略にしても外面平和を装い、侵略をせぬかに見せかけて、而も相手國を怒らせ戦端を向に開かせて、自らそれに應戦するかに装ふ侵略戦争もないと限らぬが、それと同様に形は侵略的に見えながらも、敵の侵略を防ぐ爲めに止むなく一步を積極的に戦いを始むるものもないと限らぬ。

□若もさうした場合、私共はかゝる戦争をいかやうに解したならばそれが正しい戦争として見る事ができるであらうか。或る人は侵略的立場から出た戦争を私戦と名づけ、之に對する防禦的戦争を公

戦と名づけてゐる人もあるが、實際の場合、自らを私戦なりと考へ、先方のみを公戦なりと考へる國民はないやうであるから、此の私戦と公戦との區別は第三者からでは判らないものではないか。

□何となればものは考へやうで、正戦ともなり、義戦ともなり、又公戦ともなるからである。従つて恐く今日の世界に於て凡そ戦を開くものが自ら不義侵略の戦争なりと自らを稱するものはあるまい。そしてまた、實際のところ、さうした考へを以つて戦争を開かうとするものは今日の所殆どないやうである。だから今日の國際通念としては何れの國も自ら好んで戦争を開くと云ふものはなく、たまたま戦争をするに云ふ場合、それは單なる自己防衛の外、戦いをするといふものはないことになつてゐる。

二、戦争は自衛のみ

□だから少くとも今日では自ら好んで戦争を仕やうと云ふものは先づないと云つてよい。たゞ萬止むを得ないとき即ち戦争の外には自國を守り、敵の横暴を防ぐことができない場合、初めて自衛戦として之を認むるのが今日の社會通念である。従つて今日の戦争は決して侵略の爲めの戦争ではなく、全く自衛そのものゝ爲めの戦争と云ふのが今日の正義觀念である。

□然ば今日の場合、すべての戦争は戦争の爲めの戦争でもなく、又侵略の爲めの戦争でもなく、たゞ偏へに自國防衛の爲の戦いと、平和そのものゝ爲めの戦いであること云はねばならぬ。

□而もかうした考へは今や個人同士の考へや道徳的考へと同じ意味にまで進んで來たと云つてよい。而それが國際關係の上にも認められ、國際正義としても認められて來たと云ふことは一弱小國としては此の上もない喜ぶべき現象と云はねばならぬ。そしてまた、今日のところ、さう云ふ意味(防衛)

に於てのみ國防が考へられ、又戦備が許されつゝあるが今日の有様である。

□乍然、今日と雖もその實狀を研究すれば果してどれ丈けが自己の國防のみに甘んじてゐるかは大なる疑問である。言かへれば名を國防に借つてその實國防の充實、軍備の發展は延いて國力の發展、まさかのときの武力の活動を豫期して、その國の專横がないと云へやうか。之は深く研究をせなければならぬことである。

□乍然、それと同時に軍備の充實と云ふことはその強大なる戰鬥力によつて、他國の侵略を防ぎ、或は弱小國の横暴を押えて國力の經濟的發展を助長し、又内にあつては國內の動亂を防いで、民衆の生活を安定ならしむることがないとは限らない。

□此の意味に於て、戦争必しも好むべきではないが、今日の場合また止むを得ぬものがないとは云へない。

三、戦争の否定

□ところが、こゝに一方戦争を是認するものがあるかと思へば、又それと反對に戦争を根本から否定するものゝあることを知らねばならない。而てそこにも一理ないではないものがあるやうである。

□それは一種の理想論者と云つてもよいが、凡そ人類の生活には社會の平和はと樂しきものはない。各人が争ひより争ひに走り、戦いより戦いに行くならば人類の幸福は永遠に來ないであらう。従つていかに好戦の民と雖も各人同士の中に、或は一家兄弟、夫婦親子の間にまで、戦い争ふと云ふことを好むものはない。それはたゞ自己の安泰を得んが爲めの止むなき戦いにすぎぬものであつて、戦いそのものが本來平和を得んが爲めに外ならぬ。

□之はたゞに人間許りでなく、あらゆる動物、生物に渡つて一貫した一つの眞理であつて、戦いの爲めの戦いと云ふものは本來ないのである。従つて世に戦いほごいまわしきものはなく、また戦いほご慘逆なものはない。だから戦いはそのことの理由のいかんを問はず、絶対に禁止すべきである。

□従つて、各國に於ける一切の軍備は之を根本的に全廢し、一切を戦争なるものから除かねばならぬ。かくすれば一切の人類はそこに不義の戦いを爲すにも爲されず、恰も一國內に於ける法律が一切の國內の事件を平和裡に裁くが如く、各國の紛争も各國の武力によらずして、國際裁判によつて之を裁けばよいと云ふのである。

□乍然此のことは若し今日の實際社會が許すならば恐ろしいかなる國人も軍備全廢に讚しないものはないかと思ふ。而て此の考へは已に早くから今日の社會に行はれ、各國擧つて軍備の重擔にあえて居る際とて、それに反對するものとはあるまい。たゞそれが行はれぬと云ふことは未だ國際條約の完備がないと云ふことと國際正義の考へと國民の自覺が一般にそこまで行き届いてゐないからと云はねばならぬ。

□ところが今一つこゝに戦争否定の論者のあることを記憶せなければならぬ。それは即ち近頃深く民衆の心に侵潤し來つゝある社會主義一派の戦争否定である。それは今日の戦争なるものは主として資本家階級の爲めの軍國主義の遂行にすぎない。だから今日の戦争ほど無産階級に對して不利なるものはない。だから今日の戦争は絶対に止むべきであると云ふ。

□一面從來の戦争は自國の爲めと云い、或は各人生存の爲めと云ふ。乍然果してそれらの戦争が國民の爲めであり、或は祖國の爲めであらうか。それは一つの言いかゝりにすぎずして、多くの場合、その戦争によつて損するものは一般民衆の中でも主として無産階級の人々であり、戦争によつて自ら得るものは資本家階級にすぎない。

□世の多くの人々は國の爲め社會の爲めと云ふけれど、いかなる場合にも、國の爲め社會の爲めと言ふことが直に社會全體の爲め、國家全體の爲めと云ふ場合は殆どない。それはたゞその國內に居住せる民衆の或る一部階級に於てのみ好都合であつて、その他の民衆には非常に不利なる場合がある。而も今日の所謂戦争なるものがそれであると云ふのである。

□此の外、多くの宗教家と云はれる人の間にやはり戦争を否定するものが可なりに多い。之は戦争を以つて一つの争いに過ぎないものとなし、且つ戦争は人の生命を奪ふと云ふ意味に於て最も悲惨なるものである、従つて争いを好まず、殺生を喜ばぬ佛教やクリスト教に於て之を否定しやうとすることは言ふまでもないことである。

□尙此の外に、戦争を好まず、戦いを避けやうとするものに強大國と弱小國の二つがある。それは強大國の或るものは己にあらゆる方面に自己の國土を擴大し、多くの經濟的獨占を以つてゐるが故に之以上戦争することは寧ろそれによつて得ると云ふよりも、之を失ふことが多いと思ふ國であるからである。而して弱小國にして戦争を嫌と云ふことは自らに戰鬪の武力なき爲めに戦争によつて到底勝つの見込がないからである。

四、宗教と戦争

□然ば宗教と戦争とはいかなる關係にあるべきか。之を從來の歴史に見れば、宗教必ずしも戦争を否定せず、又必ずしも是認せないやうである。それは今日のころ宗教なるものが必ずしも同一でないところから、同じ宗教を信する人にもその立場によつて、戦争に對する態度が違ふからである。

□乍然それにもかゝらず、すべての宗教が戦争と平和と何れを選ぶかと言つたとき、平和ですむも

のを進んで戦争を選ぶ場合はないやうであるが、之は主として一般の宗教が世界的、人類的宗教となるほごその傾向は一層大である。何となれば宗教の本質は主として、人類の平等、博愛、自由等を尊ぶものなるが故に、邪惡を制する觀念は強いけれども、敵をも許さうと云ふ考へは慈愛の中に戦争を否定するではなからうか。

□従つて、宗教が戦争を許す場合と云つても、それは正義の戦いのみであつて、徒に敵を覆滅せんが爲めの侵略主義ではない。尤も同じ宗教と云つても、原始時代の宗教や、野蠻未開の宗教には戦争を以つて神の好むところとなし、侵略も殺人も以て一つの誇りとなると云ふやうな宗教もないではないが、人類の文化は社會的道德の變遷と共にさうした宗教も無くなつて來るやうである。

□従つて、宗教の進歩は亦道德の進歩と相一致し、戦争と道德との關係は延いて宗教と戦争との關係の上にも同じ變化をするかに見える。従つて多くの宗教にも戦争を絶對に否定してゐるものも少いやうである。否場合によつては正義を名とし、戦争を是認することも絶無では無かつた。

五、釋尊の立場

□然ば佛教では戦争をどう見たか。之を釋尊の生活に見るに釋尊の教へには戦争を否定したところもなければ、又之を是認したところもないやうである。乍然釋尊自身の生活とその弟子の説教は常に闘争を避けて、自ら平和の道に進まれたことは明かである。

□然ば釋尊は戦争に關しては全く無關心であつたであらうか、釋尊の當時、而も戦争が無かつたと云ふのではない。否、それどころか、釋尊の本國もその爲めに亡びたではないか、而も釋尊はそれを見て別にどうせられたと云ふのでもなく、反つて靜にそれを見てゐられたやうである。それは一體釋

尊が母國を愛せられない爲めであらうか。それとも自ら信ずるところがあつて、それを傍觀してゐられたのであらうか。

□此のことを或る人は釋尊が非社會的であり、非愛國的であると難する人もある。乍然釋尊の生活は更にそれよりも超國家的な大社會主義があつたのではなからうか、その證據には誰一人として當時に於て釋尊を非國家的と云つて難するものもなく、等しく一切の民衆が佛陀世尊として神の如く之を敬つたと云ふことは深く反省すべきことである。

□されば釋尊の生活に於て、一切の殺生を禁じた釋尊が戦争を否定したことは言ふまでもない、たゞ時と場合に於て之を廣言せられなかつたまでである。従つて私共は釋尊の無抵抗を攻むるよりも、更に一步を進めて釋尊の超國家的人道の一大活動をこそ永遠に學ぶべきではないか。

□國の爲めに自ら守り、一國の盛衰にその身を献げて、防戦之つとむる愛國的態度も許より我等國民として深く賞讃すべきことではあるが、更に一步を進めて、我他彼此の見解を打破して、四民平等の天地の大愛に生きると云ふことは深く道を愛するものゝなくてはならぬことではないか。

(一九三二、一一、三)

宗教と人生 (二)

土屋 觀道 述
安田 恢 順記

第三、釋尊の教へ

そこで佛は是等の人々に對して自らの悟りをいかに説

法せられたかと云ふに、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の教へを説かれたと云はれて居ります。近頃の新しい原始佛敎の研究では釋尊の初めての説法に十二緣起を説か

れたと云い、或は苦集滅道の四諦を説れたと言はれて居りますが、三者は要するに一つとなるのであります。即ち人生の苦難を脱するの唯一の道を説くものであります。て、解脱と云い、涅槃と云い、菩提と云ふのも決して別なものではないのであります。そのことから云へば極樂も淨土も往生も成佛も要するに言葉の相違にすぎぬものであつて、それはたゞ解脱の境地を多方面から云つたことに外なりません。

ところで、印度では古來解脱と云ふことを非常に尊んだものであります。或は菩提と云い涅槃と云い、佛陀と云ふことは後には佛敎の専有語のやうになりましたが、それらの言葉は佛敎以前にも已に印度では尊ばれた言葉であつたのであります。それは何故かと云へば印度は御承知の通り、非常に熱心な宗教國でありまして、特に現在の人生苦を超越しやうとする研究が盛んな爲めに、それらの解脱を意味する色々の言葉が尊ばれたのであります。従つて古來印度には其の熱帯の爲めでもありますが其の生活苦を脱せんとして、之を宗教に求むることが多いので釋尊の佛敎がそれらの影響を受けてゐることも勿論であります。

ところが、それ以外、實際人生の生活に於て、果して此の世は楽しいものか、人間が此の世に於て思ふまゝに

なるまでは可なりに楽しいには相違ないのであります。又一面から見るときは到底此の世は此の世だけで私共の眞の世界を満足するものではないのであります。之は私共の生活が常に永生と向上とを求むるが爲めに、單なる此の世の人生だけでは満足することができないにもよるのであります。又一面から言へばそれだけ此の世が不完全であり、此の世が私共の理想の世界に適しないからだとも言へるのであります。従つて、それらに對し私共の考へがどうなつて來るかと言ふに、凡そ四つに別れて來る。一つは此の世を何とか改造して、自分達の生活に都合のよいやうにしやうとする考へ、二つにはそれが出來ぬので、此の世にあきらめをつけて他方世界に移住しやうとする考へ、第三にはそれもできないので此の世にのらくらとして生き行く生活、第四は以上の三つが色々組み合はされて其の時代に相應する生活と考へとなつて來るのであります。世に思想、道德、宗教などがありますが、要するに以上の考へが現實生活の上に現はれて來るにすぎません。

然私達は其中で何れの道をとるべきであるか、そして其の中でも釋尊の生活はどの道をとられたか、又その後の佛敎はどの道をとつたかと云ふことを考へて見ますと非常に爲めになることが多いのであります。

第四、諸行無常

吾々は佛教でよく無常と云ふことを聞きます。無常と云へば何となく此の世がたよりのないものだと思ふ感じを興えられるのが今までの佛教であります。一面から云へば之は實に佛教の眞相を私共に語つてゐるかと思ふのである。何となれば世には之を以つて佛教の厭世主義だといふ、或は否社會性だといふて難する人もありますが或る意味に於て、實際の此の世ほど味氣ない世界はありません。なづかき父に別れ、妻に死なれ、夫に離れ、可愛い子供を失ふのも此の世であります。いつまでも生きて居りたいのに、病氣で死んだり、年とつて死んだり、生存ができないと云ふことは人生の無常を一層に示されてゐるのであります。此の世が厭やだと云ふのではな、夫婦相和し、兄弟相信じ、親子揃ふて、末永く此の世に睦むと云ふことはいかに此の世が楽しいかと云ふことを物語るでないかと云ふ人もありますが、それは僅に人生の或る一部であり、短日月にすぎぬのであつて、かくの如き楽しい生活もそれはほんのつかの間であります。そして、それらの楽しみの多かつた家庭ほど、それだけ此の世が淋しく又無常として感ぜられるのはあります。すまい。

す。人生僅に五十年と古人が言つたが子供の時にその五十年がたいへんに永いやうでしたが、愈々となつて見れば實に五十年なんか夢のやうです。「人生七十古來稀なり」と古人が云つてゐるが多くの人々はその古來稀なりの七十の中に自分を喜ばふと思つてゐるのをおかしいのではありませんか。七十になれば八十を願ひ、八十になれば九十を願ふのが人生であります。而もその内誰か百、二百を望みうるものがあります。やつぱり人生は無常であります。それも皆が一緒に逝くならよいがボツリボツリと一人づゝ逝くのだからたまらない。之でも私は死ぬのがいやでなりません。死ぬのが恐しいと云ふよりも私は死ぬのが嫌でなりません。之は私一人ではなからうと思つて居ります。かうした事から人生を考へれば釋尊が人生を苦なりと見られ、此の世を無常なりと觀破せられたことは必ずしも誤つた考へではありません。かくて多くの人生は決して楽しい生活のみではないのであります。苦しい、悲しい、惱みの生活のみが續く人も多いのです。

殊に近頃の不景氣は一層に社會の生活苦をそゝるものであり、或は就職難、失業難、商賣難があり、或は資本家と勞働者、地主と小作人等の鬭争が思想的にも實際的にも人の心腑を斷つやうなツメキとなつてゐるのであり

「あすありと思ふ心のあだ櫻、夜半にあらしの吹かぬものか」とはよく人生の無常を語つて居りますが、人間の一生は全く此の通りであります。尤も哲學的に云へば無常が必ずしも悪いものではありません。無常であるからこそ、悪いものか好いものに變り、小供が大人となり、貧乏が富豪ともなる、之皆無常のおかげでないか。人が生れて死ねばこそあとから生れたものも生きて行かれる。生れたなりで死なぬとしたら人生の苦難は大へんだ、此の世界の無常は恐るゝに足らない、よきよりよきに變ればよいのだ。それはたゞ世の中の見やうにすぎぬと。

乍然佛教の無常はそんな淺はかなものではありません。たゞ人生の無常と云ふことを人生常なしと言ふだけで、常に間斷なくよい方に變つて行くと云ふならば誰か此の世に悲しむものがあります。乍然實に人生の生老病死はそんな言葉では脱し切れない人生の惱みであります。そこに人生の悲哀がある。

今年の四月號(眞生誌)にも書きましたが、時の過ぎるのは速いものです。正月だ元日だとさわいてゐたのは昨日のやうでありますのに、今年も已に四月半となりました。一度すぎ又と歸らぬのが人生である。蝶よ花よとめづる間に人生の過半は夢のやうにすぎるのであります。

ます。

人生の種々相

中には人生は+(プラス)と-(マイナス)で結局は○(ゼロ)だと云つてゐる人もある。即ち苦があればこそ樂みもあり、樂しみがあればこそ苦しみもある、而もその苦みと樂しみとは相半ばする。だから苦しみ多ければ樂み多く、樂しみ多ければ亦苦しみも多い、而も大きな樂しみには又大きな苦みが伴い、大きな苦しみには又大きな樂しみが伴ふと云ふのです。従つて又樂しみなきものには苦しみもなく、苦しみなきものには樂しみもないと云ふのです。

又或る人は生死の問題について、人は生れたからこそ死ぬるのだ、生れたからには死にさへすればそれでよい、死ぬのがいやなら生れねばよい、生死のことなど云ふだけがやほだと云ふのです。

又或る人は人生はさうハツキリとしたものではない、よいこともあれば悪いこともある、「人間萬事皆翁が馬」だと云つて、一切の苦樂をナイノノで押し通して行く人もある。

それかと思ふと、人生のことなどテンデ考へる暇もなくその日の生活に追い廻はされてゐる人もあり、或は一

生を何の苦もなく酔生夢死で行く人もあり。

中には親の意見もきかずに好きな男とかけ落ちしたが間もなくそれに捨てられて、一生を苦んでゐる人もあり、中には親の意見によぎなくされて嫌だいやだで小供ができて、二人三人となる間にとうとうあきらめて一生を送る人もあり、中には途中からあきらめて、それが反つて一生の幸福となることもある。

その他、初めは祝福で暮したのがあとで貧困で苦しむ人もあり、或は初めに貧困で後に富裕な人もある。或は金銭には事かいたこともないが、家庭に風波の絶えたことがなかつたり、一家は圓滿だが親戚と折り合はぬとか、親戚とは問題はないが朋友と仲ちがいを生ずるとか、或は夫婦が圓滿でない爲めに外に女ができたとか、或は妻が不身持ちで困つたとか、或は思いがけない火事だ地震だと云ふやうな事變に當つて、妻子を亡くしたとか、或は足が折れたの手が切れたのと、此の世は必ずし

或る青年の嘆き

(失職思想問題に就て)

土屋 觀道

「私に一人の友人がありますが、この頃しきりにマル

クス主義の研究をやりだしましたが、その結果私にもそ

れを研究せよと勸むるやうになりました。ところがマルクス主義と云ふものはそんなに危険なものではないやうです。危険どころかその中には私共にも成程それに相違ないと云ふやうな點も可なり多いやうであります。此の分では私もマルキストになりさうですが困つたものです。」

「本當に自分が好きならばそれになつたらよいでせう。それにいかにマルクス主義と云つたとて、一から十まで危険ばかりでもありません。あれだけの世界の人が之を信じ之を奉ずると云ふ位だから、そんなにつまらぬものばかりでもありません。」

「ところが、ソナナことを研究すると、ついそれに引こまれて、私自身と云ふものがその主義の運動にまで入りたくなつて來るのです。ところで今日の國家や社會は私共にその運動を許さぬではありませんか。そこに私共の生活が非常に困つて來るのであります。」

「乍然それも亦止むを得ないではありませんか、昔から正義の爲めなら身命も惜まぬと云ふのが本當の人生であり、又生き涯いであるならば今日の政府の壓迫や社會の迫害など何でもありませんか。古來多くの偉人は一としてその困難にぶつつかぬ人々はないでせう。」

も無事泰平で行くものでない。

而もかうした人生にそれを一々切り開いて限りなき人生の前途に眞實の光明を與えるものが宗教であります。

私は宗教に入つたから、それらの事件が直ぐになくと云ふのではない。もとよみ偉人の生活でない限りそれらのもつれがないと云ふことではありませんが、乍然それらの苦難のすべてに對し、いかに眞實の宗教が私達の生活に限りなき慰安を與え同時に亦それらに對して私達の取るべき態度を指示するかと云ふことは恐らくは思ひ半に過ぐるものがあります。何となれば眞實の宗教は私共に永遠の生命と無限の向上とを與えるものでありまして、すべての望みと喜びと力の生活を與へるものであるからであります。眞實の宗教はいかなる貧困も病苦も早死にも之を動かすことができないからであります。

(一九三一、一一、九、再校)

「すると私はマルキストになつてもよいでせうか。」

「さあ、それはどうか私は知りません。私はマルキストではないのですから、そしてまた、私は今のところ、マルクス主義の全部に賛成してゐるものでもないのですからね。たゞあなたが心からマルキストがよいと信じ、又それによるより外に自ら行く道がないと云ふなら、たゞその道を以つて一切を清めたらよいだらうと云ふにすぎないのです。ところで、あなたのマルクス主義と云ふのはどんなものなのです。」

「さう言はれると私もまだマルキストと言はれるほどの學者でもなく、又それに對する信者でもないのですから、其の實は官權の壓迫や、世間の批難まで押切つてそれを實行しやうとするまでには至つていないのであります。だからその實を言ふと私はまたマルキストと云ふことのできる程自分は斷言のできる元氣のないのを大いに恥ぢて居りますが、實は友人の言ふところに大に共鳴したと言ふ位いのです。」

「先づその共鳴したと云ふ點を尋して見て下さい。私にも參考になることと思ひます。またそれについて私の考へでもあつたら御注意させて頂くこともありませう。」

「それと云ふのは外のことでもありませんが、實は近頃私は非常に就職難で困つて居ります。それもこのなりで

行くならば早晩その日の生活にも行き詰つて、全く餓死するより外に道がないのです。先達でも仕事がないのでどうにも仕やうなく、私の古郷に歸りましたら、私の親たちはそれこそ目もあてられない貧困の生活にその日を送つてゐる爲めに、早々に再びこちらに於て来た次第です。とても田舎の農貧生活は私たちの居食を許しません。かう言へば君も何故働かないかと言ふ人もあります。働くにも仕事がないのをどうすることもできません。中にはそれは嘘だ働く氣さへあれば仕事のないと云ふことはないと言ふ人もありますが、それは非常な誤りです。働きさへすれば仕事があると云ふ如きは十年の昔のこと、今日の失業者は決して懈けてゐるからではないのであります。先生は今日の失職者を懈けてゐるからだと思いでせうか。少くともその失職者の大半は眞剣に今まで働いて来た人が多いのです。而も失業は不まじめな爲めでもなく、又懈けるが爲めでもなく、充分に眞剣に働かうとし働くことのできないものが多いのであります。それは近頃の産業の合理化と云ふやつで整理されたものが多くからであります。かう申しますと、仕事がないれば仕事を創造せうなどと云ふ人もありますがそれはまたあまりにもひどい言い方でせう。それは百千人の中一人二人はそんな人もありうることでせう。乍然それ

を以つて私共愚直なものにまで之を強ゆると云ふことは無理です。然ば今日の就職者は悉くがそんなに偉い人ばかりでありませうか。私にはそれが反つてどうかとさへ思はれます。中にはそれでは仕方がないと言ひ放つ人もありますが、仕方ないからとて、職のない私にはそれで餓死するわけにも行かず、かと云つて、殺人や強盗にもなれず全く今後をどうするかと日夜不安に暮れてゐると云ふ有様です。」

「乍然それは今日の失業者ばかりではありませんまい。多くの資本家と云ふ大半が殆どそれと等しい苦難に陥つてはるませんか。」

「それは全く仰せの通りかも知れません。乍然それにして、今日の失業者は全々その働くべき何等の口もないのですから、それらの資本家の苦しむより更にひどいものでせう。小さい資本家は大きな資本家に倒され大きな資本家も生産過剰で全く行き詰つて居りませうが、それでも尙今日の生活そのものに直接困つてゐるかは問題であります。而もそれがよしんば困つてゐるとしましてもその爲めにマルクス主義を否定する材料とは毫もならないのです。否それどころか、それが所謂資本主義の第三期に當るのであつて、所謂資本主義経済組織の行詰りとして當然來ねばならぬものと云ふのです。而それが

資本主義の社會政策では何とも展開の道がないと云ふのであります。乍然それがたとい資本主義によつて、展開することができないからと云つて、多くの民衆がそのまゝで、餓死することもできぬので、此の展開は所謂勞働階級の手によつて救済されると云ふのがマルクスの見解たさうです。乍然それ位のことには已に先生にはとづくに御承知のことと存じますがその實動體がかの所謂××黨事件と言ふではありませんか。そして彼等は此の世を眞に救ふものは吾々マルキストのみであると言つて居るさうです。それに尙その友は言いました。君は宗教を信じてゐると云ふが、そんな宗教はよし給へ、宗教は阿片だよ。宗教なんかを信ずると全く人物が馬鹿になるよ。何でもかんでも因縁だとあきらめ、善いことも悪いことも業だと云ふ。それでは全く此の世を改造することは出来ないではないか。神だの佛だのと云ふものは人間が或る時代に勝手に造つたものにすぎない。而もその爲めに今や多くの人間は本當の人生もわからず、正義の戦いもできなくなつてゐるのだよ。君宗教が經濟問題を解決しうると思ふか、今日の宗教はむしろそれから逃避してゐるのではないか。否それどころか反つて宗教は此の問題を正しく解決することを妨げてさへゐるではないか。殊に今日の多くの寺院の僧侶を見よ、彼等がどこに本當の

生活をしてゐるか、徒に資本主義者の思想を援助し、一として貧民大衆の眞の救済に努力してゐるものとはないではないか。彼等は全く不勞所得者の一人にすぎない。然るにマルクス主義のみは此の經濟を解決する。そしてまた此の横暴なる資本主義や、その帝國主義を打倒して、眞實民衆の生活を開拓すると。彼等はそんなに言つて居ります。」

「ところであなたはそれに對してどんな感じを持つてゐますか？」

「そこが私にはまた判然といたしません。何となればあなたの宗教はそんなものではないと云ふことをかねてから知つて居りますから。」

以上はたゞ私の知つた一青年の話にすぎない。乍然近頃の青年がいかなることを考へつゝあるかとの一参考にもならうと考へたので、そのまゝをここにかけることにした。説の當否は暫く別として、今日の僧侶並に有識者當局にも一考すべきものがありはしないか。

(一九三二、一一二)

十一月號 休刊

南支の旅 (三) 休み

境遇の相違か

土屋 觀 道

此の春の事でした。私は中學時代の舊友に會いました。それが已に二十何年ぶりのことです。友はその後某大學の商科を卒えて、實業界に働いてゐるを聞いて居りましたが私の無二の友だつたのです。だから、私にはその後も一度訪れたいものだと思ふ念願が絶えませんでした。そこで丁度一日の暇を得たのでわざわざ彼をその地に訪れたのです。

友も非常に喜んで私を迎へてくれました。初めの間はあまりに永年會はないので、その年をまつたので一寸昔のまゝの気分もしませんでした。お互に昔のおもかげが現實に呼び出されて来るさ、昔のまゝの懐しさや心やすさが現實を支配して、舊友のよしみが一層を覺えたのです。

處がその中でも、二十何年の間お互の立場がスツカリ違つてゐる爲めか、その

後の彼の生活と私の生活とはお互に全く無關係になつた爲め、全くその途を異にしてゐるのを知りました。彼はすべてが物質生活であり、所謂實業生活、經濟生活のこのみであり、私は主として、精神生活、宗教生活のこのみです。従つて

お互の今までの事状を知りたい、聞きたいと思ふ念願に燃えて居り乍ら、その話をお互にして見ると、どうも各自に經驗がないところで全く別世界の感がして興味がないのです。

二人は博物館で合いました。久淵りを喜び乍ら、館内の佛像や、奈良朝時代の繪巻物などを見て廻りました。その時のこの御姿に見られたり、その佛像を通して當時のこゝなご話し出すことが度々でした。君、之は奈良朝時代の作だが、仲々よく出来てゐるではないか。今時の人に

は之だけの氣分を出し得る作家がない、之は主として現代の氣分が當時の氣分に比して非常に宗教的でないとも云へるね」むう、そんなものかね、先達僕の知つてゐる××古物商で一佛像を三千何百圓で米國人に賣つたのがある、それは鎌倉時代のものと云ふのだが丸でなつてゐない相だつた、それに比ぶれば之なんかさても立派なものだが、今之を賣るさしたら大したものだらうね」金さしても大したものだが、君、此の御姿の尊さは又大したものではないか、僕はかうして立つて此の御姿を見てゐるだけでも佛教の偉大なる一つの恩恵を靜に教えられる感じがする。佛像は一面から見れば單なる一つの木像に過ぎない、然しその一つの木像が單なる一つの木像でなく、之を彫刻する人の心の中に入つて見ると、その人の心の信仰をこの一つの木像の上に刻み現はしたと云つてよい。して見ると或る點までは此の彫刻によつて、その作者の心に映じた信仰を此の佛像を通して知ることまでできるではないか。」それはそうだらうね」ところがその信仰と云ふもの